

「田舎の政治学」に想いを込めて

神原 勝

北海道大学名誉教授

本日の十亀先生を偲ぶ会に参加するにあたり、これまで先生からいただいた著書とあらためて対面したいと思ひまして、昨日は終日、書庫にこもって先生にお付き合ひしていただきました。もちろん、いただいたときに読んでおりましたが、あらためてページをめくりますと、先生が、地域自治と民主主義の確立のために注がれた情熱がいかに大きなものであつたか、またそれゆえにビッグな存在であられたことをあらためて確信しました。

私の手元にある先生のご著書は、『北海道の政治と民主主義』（一九七四年）、『北海道の政治風土』（一九七七年）、『北海道の政治と選挙』（一九八〇年）、『北海道の自治・政治・文化』（一九九三年）、の四冊の単行本と、教材（資料）として特別に編集された『地方自治論—資料—戦後地方自治の歩みを学ぶ』（一九九六年）です。単行本はいずれも北海道地方自治研究所から発行され、一九六二年から一九九五年まで、約三〇年間、折々に書かれた論文等が収録されています。

みなさんお気づきのことと思いますが、本のタイトルはいずれも『北海道の〇〇〇』となっています。名は体を表すといいますが、これは「北海道」という「地域」に対する先生の拘りの強さをあらわすものにほかなりませぬ。先生が亡くなったのち、新聞などで先生は「田舎の政治学」をやるのだと教え子たちに語ってきたというエピソードをしばしば目にしました。本日の偲ぶ会のしおりの表紙

にも「田舎の政治学」という文字が見受けられます。

先生は「田舎の政治学」という言葉にどんな想いを込めたのでしょうか。先生が初期のころ書かれた論文には一九六二、三年のものが各一本あります。このころ、すなわち一九六〇年代の初頭は、政治の成り立ちや民主主義の発展にとつて「地域」や「自治」のもつ意義が、政治学において提起されはじめた時期です。それまでのおおよその学問は、戦後になつても依然として明治以来の官治集権に呪縛された国中心の理論で構成されていきました。

新しい提起の直接のきっかけは一九六〇年の安保国民運動でした。この運動の挫折を経験して民主主義の危機を感じ取った人たちが、地に足の着いた民主主義を構築するために、市民に身近な政治の重要性に着目して、「地域民主主義」「自治体改革」などの新しい問題を提起したわけです。現在に続く地方自治の展開は実質的にはここからはじまります。この当初から先生は、数少ない先駆学者の一人として、この新しい流れの創出に力を注がれました。

先生をしてこの研究の道に駆り立たせた動機について、先生は本のあとがきやエッセイなどで繰り返し記されておりますが、悔恨の戦争体験と充足感に乏しい戦後民主主義に向き合つて、いわば先生の全人格を投入して発見された道だつたと思ひます。したがつて、先生の「田舎の政治学」とは、市民とその政府である自治体に基礎をおいて確かな民主主義を構築しようという、先生の確固たる想い

を総称する言葉だったのです。

昔から「学問をするために都に出る」という言葉がありますが、十亀先生は「北海道永住は自分の研究にとつての大きな利点だ」と書いていました。これまで北海道の大学には大勢の政治学者が去来しましたが、北海道に根を張って、北海道に拘って書き、そして北海道を語った政治学者は十亀先生を措いておりません。それが何事にも真摯に向き合われるお人柄と相まって、先生に対する大きな期待と厚い信頼を生んだのだと思います。

認識や価値観のレベルにとどまらず、先生は一貫して実践の世界を重んじました。収録されているたくさんの討論を読めばよくわかります。先生が地域や自治の研究を志されたころ、一九六三年に第五回統一自治体選挙が行われ、このころから全国的に革新自治体が増大します。帯広市の吉村博市長はそれ以前からですが、旭川市の五十嵐広三市長、釧路市の山口哲夫市長をはじめとして、一九七〇年代にかけて北海道は革新自治体の牙城となります。

この革新自治体が先導して自治体改革が行われるのですが、そのあり方をめぐって活発な議論が行われます。いわば革新自治論壇ともいべきものが形成されますが、その中心におられたのが先生です。革新市長の面々、山内敏雄さんなどのブレイン、ジャーナリスト、また運動面からサポートした自治労のみなさんなどが煩瑣に登場して、先生の巧みなさばきのもとで熱い議論を展開しています。本日の司会者の三輪修彪さんもそのなかの一人です。

十亀先生なくしてこのような論壇はつくれなかつたでしょう。これらの討論の多くは、北海道地方自治研究所の所報「北海道自治研究」に掲載されたものです。研究所は一九六八年に設立されて今日に至っていますが、先生は当初から理事として、後年は副理事長・理事長として活躍されます。この当時私は東京におりましたが、研

究所の所報や先生が理事長をなさっていた札幌都市研究センターの会報を読んで、北海道の活発な議論を伺っておりました。

また先生は、長年の選挙分析を通して、北海道の政治構造を「デュアリズム」という言葉で特徴づけました。全国的には劣勢な社会党（後には民主党）が北海道では自民党と拮抗する力をもっているという意味です。先生は社会党が強いことはプラス評価しながらも、一方では克服すべき課題も認識されていて、「北海道の地方自治は首長選挙における政党間対抗が主要な関心事で、参加と公開で自治体を運営する政策的・制度的な構想力が弱い」とおっしゃっていました。

裏を返せば、「その課題はお前たちがやれ」と、私たち次の世代に示唆されたわけです。私はずつとこのことが頭から離れませんでした。ここ一〇年ほど、自治基本条例、議会基本条例、総合計画条例などを提唱しているのも、先生たちが築かれた一九六〇年代以降の自治体改革の成果を継承・発展させて、分権時代にふさわしい「自律自治体」の構築に繋がっていかうと考えたからであります。けれども道半ばにしてもう古稀を迎えてしまいました。

今年はいよいよ別れが重なります。二月には福祉自治体を先導された小林勝彦さん（元鷹栖町長・元道町村会長）、五月には五十嵐広三さん（元旭川市長・元内閣官房長官）、そして同月に十亀先生までが……。いずれの方も、かつて五十嵐さんが「ロマンに満ちた痛快な時代」と回顧された革新自治の時代を築いた大先輩のみなさんです。この言葉を思い出し、自分も少しだけ先生たちのDNAを受け継いでいるのかなと思つてさびしさを紛らわせています。

（二〇一三年九月十五日）

故十亀昭雄先生を偲ぶ会における追悼の言葉から）